Maebashi Biennale 2026 ／ 地域協働プログラム

ARKHENODE

移動式公開編集会議「アルケノード」

2026.07.18 sat





第四回簡易記録

裏弁天の逆襲

非売品
立読専用

二〇二六年七月十八日、土曜日。前日からの雨が残るなか、移動式公開編集会議「ARKHENODE（アルケノード）」の第四回が開かれた。

午後三時、本屋水紋に集まった参加者で、機材を積んだ屋台を引いて前橋まちなかを歩いた。最後にたどり着いた裏弁天通りの「hengeni」で、三人のゲストの話を聞いた。

ゲストは、本屋と学習塾とアトリエを兼ねるhengeniの金山慎太郎さん、金山杏菜さん。そして、二軒隣でスペイン料理店CASA FRESCOを営む野口泰平さん。テーマは「裏弁天の逆襲」。



ARKHENODE とは

ARKHENODE — 前橋国際芸術祭2026の地域協働プログラムのひとつ。まちで活動するひと・店をゲストに、屋台を引いて街を歩き、そのあと公開取材の形でトークを開催。
半年分の記録は、来春に一冊のZINEに仕立て上げる。



まち歩き

ACT 01 — ARKHĒ

arkhē — 始まり・根源





前日からの雨が残るなか、本屋水紋から屋台を引いて出発。ゴールは裏弁天のhengeni。三回目までに通っていない銀座通り、千代田町、まえばしガレリア方面を回ることに決めた。まずはグリーンウォークを抜けて国道を横断、しののめ信用金庫の前橋営業部へ。

このビルは、一九六四年築の旧・前橋信用金庫本店を、HAGISOの宮崎晃吉さんの設計でリノベーションしたもの。二〇二二年九月にリニューアルオープン。通常の信用金庫窓口機能のほか、コーヒースタンド、ライブラリスペース、レンタルできる「つどにわホール」等がある。今回は特別に見学させてもらった。





前橋スズラン、スキヤキハウス「最後の50セント」の前を通り、引き手を交代しながら進む。





まえばしガレリアに到着。前橋まちなかエージェンシーの根本さんによる解説を受けたあと、全員で展示を楽しむ。

その後、オリオン通りへ。別名「ブラビ通り」。三人組ユニット「ブラックビスケッツ」が木彫り像を売る企画をやったことに由来し、その木彫り像は今もとんかつ屋「大野屋」に置かれているそうだ。

通りを抜け、hengeniにゴール。



ACT 02 — NODE

公開取材

node — つながり・節

GUEST 01

金山慎太郎

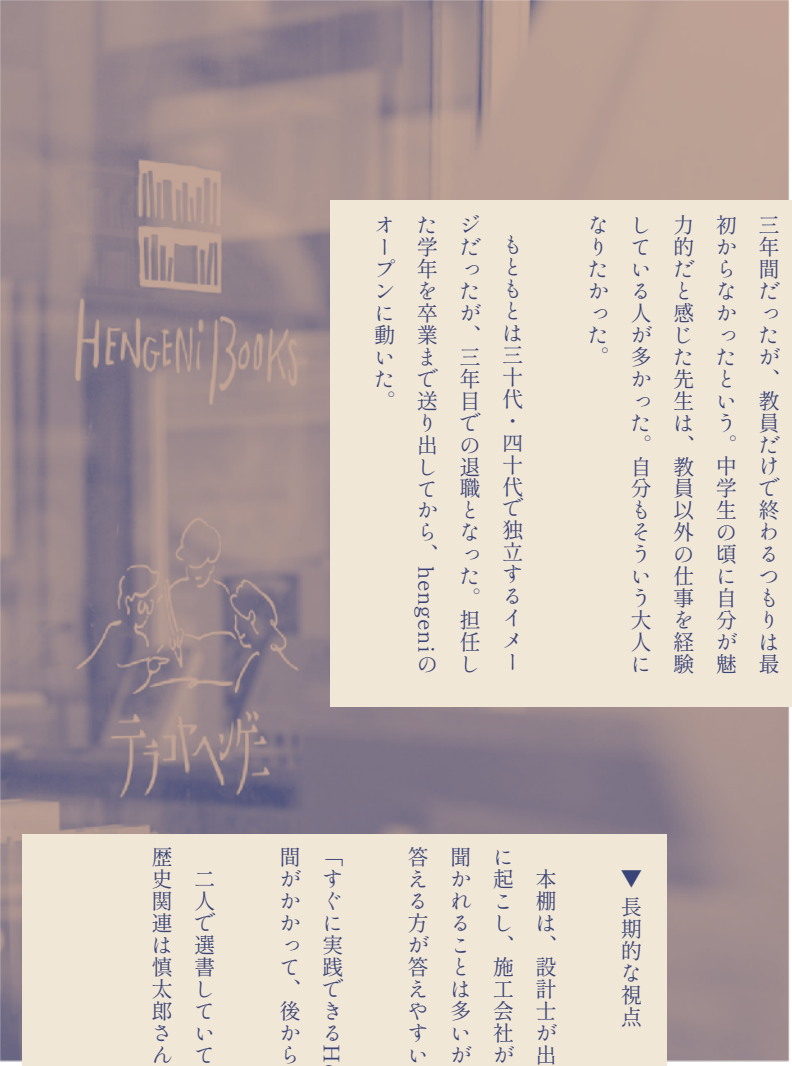
hengeni

▼前橋の野球少年が本屋になる

前橋出身、二〇〇〇年生まれ。小学校四年生から少年野球を始め、中学・高校まで野球一本の体育会系な学生時代。本屋をやっている今の姿は、当時を知る人からするとかなり意外らしい。

大学は群馬大学の教育学部、社会専攻。高校時代、受験期になると朝から二十二時まで元気プラザで勉強していた。毎週末通っていた「かつどんなかや」が、高校時代のまちなかの思い出になっている。





▼社会科教員として過ごした三年間

大学卒業後、太田市の強戸中学校に社会科教員として配属され、三年間勤務。野球部の顧問も担当した。同僚にも子どもたちにも恵まれた三年間だったが、教員だけで終わるつもりは最初からなかったという。中学生の頃に自分が魅力的だと感じた先生は、教員以外の仕事を経験している人が多かった。自分もそういう大人になりたかった。

もともとは三十代・四十代で独立するイメージだったが、三年目での退職となった。担任した学年を卒業まで送り出してから、hengeniのオープンに動いた。

▼長期的な視点

本棚は、設計士が出した「トンネル型」のアイデアを図面に起こし、施工会社が製作。本は約千五百冊。選書の基準を聞かれることは多いが、逆に、置かないようにしている本を答える方が答えやすいという。

「すぐに実践できるHow-to本は、あまり置かない。もっと時間がかかって、後からじっくり効いてくる本を選んでいる」

二人で選書していて、緩やかにジャンルが分かれている。歴史関連は慎太郎さんが担当することが多い。



GUEST 02

金山杏菜

hengeni



▼本のある家で育つ

一九九九年生まれ。母が学校図書室の司書だった時期があり、小学生の頃から本に囲まれて育った。

同じ群馬大学の教育学部、保健体育専攻に入学。空手をやっていて、国公立大学の全国大会で優勝している。当時は体育教員になろうと思っていた。

大学時代、「馬場川通りが二〇二一年からソフト・ハード両面で変わる準備委員会を発足します」というチラシを見たことが、まちづくりに関わり始めたきっかけとなる。



▼立ち止まって、考える

大学三年の教育実習を終えたタイミングで一年休学。「なんで自分は学校に行きたくなかったんだろう」を考え直すため、長野の軽井沢風越学園など、公教育以外の場を見に行った。ジュエリーを作り始めたのもこの期間で、西片貝町のwag houseの彫金教室に通って学んだ。

卒業論文のテーマは「学校現場における子どもの過剰適応」。学校が「よい子」を目指さざるを得ない構造をはらむことを指摘するなかで、他者の顔色をうかがわずに自ら学べる場を作りたいと考えるようになった。

▼手紙舎、そして開業へ

手紙舎前橋店（千代田通りにあった雑貨店）のオープニングスタッフ募集を見て応募。面接一人目で採用され、オープンから入社した。

退職後は、公共広場を作るプログラムに参加したり、ジュエリーの個展を開いたり。高崎の深煎珈琲焙煎所Niksenと、その二階の学習塾桜咲でアルバイトもした。ZINEの制作もこの頃から。「何を、どう形にするか」を模索した一年だった。

二〇二五年一月に結婚。結婚指輪は二人でアイデアを出しながら制作した。開業準備の期間は、大間々のチャレンジショップ「ななし」に棚主として古本を置き、高崎のレベルブックスで読書会を開くなどの活動を行っていた。

GUEST 03

野口泰平

CASA FRESCO

▼空港とうなぎの街から

出身は千葉県成田市。高校一年生からマクドナルドでアルバイトを始めた。

生き方の軸になったのは、一九八二年公開の映画『ワイルドスタイル』。ヒップホップの始まりを描いた作品で、ブレイクダンス、ラップ、グラフィティの三大要素が詰まっている。先輩の家でビデオを観て衝撃を受け、十年ほど前の再上映も映画館に観に行った。

料理の道に進み、東京でスペイン料理店に十年ほど勤めた。しかし一時期は料理が嫌になってしまい、ファッションの仕事に転職したこともあった。その後、友人のスペイン料理店に誘われて、ふたたび料理の道へ。







▼スパイスとつながり

娘の誕生をきっかけに、十一年前、妻・沙織さんの実家がある前橋に移住。開業の三年ほど前から、スペイン料理のスパイスを混ぜてパッケージして手売りするところから始め、漬け込んだ肉を持って、友人の店の外で焼かせてもらうポップアップも行った。その後、Bentena SHOPの七夕祭りにも出店。

コーヒー豆は東京・下高井戸のタチアナ焙煎所で焙煎してもらっている。リヤカーを使うようになったのも、この焙煎所からインスピレーションを受けた。

▼穴の空いた屋根

店舗を開こうと広瀬川沿いの物件を探したが、当時はコロナも重なり、断念。落ち着いてから、今の裏弁天の物件を紹介してもらった。初めて見たときは屋根がボロボロで、空が見えていた。みんなに、「ここはやめた方がいい」と言われた。

「でも自分的にはここがすごく良かった。どうしてもここでお願いします、と話したんです」

店のカウンターはバラして車に積めるようになっていて、コの字に組み直すと、真ん中で焼いたパエリアを囲んで食べることができる。





Q　まちなか及び裏弁天の魅力は？

慎太郎　実は、店舗の候補地はまちなかに絞っていたわけではなかったんですよね。ただ、いろいろ探した中で、この**建物の雰囲気に一番惹かれた**のかもしれない。それがまちなかとの縁でしたね。

杏菜　学習塾をやっていますが、子どもたちにとって「勉強のためだけに来る場所」にはあまりしたくないと思っていて。**偶然いろんな大人と出会っちゃう**、みたいな形にしたい。いろんな大人が出入りする場所は、子どもにとって、めちゃくちゃ大事だと思うんです。実際に、土日に自習室に来た子どもたちがdiffの展示を見に行っている、なんて光景もちらほら見られてきて、見たかった光景が広がってきていると思います。

野口　川があるっていうのが、まず良かったですね。広瀬川はすごくいい。あと、**「裏弁天」の「裏」がいい。**普段は通らないんだけど、通ってみたら何かあった、みたいな。旅行先でも、面白い店は面白いところにあったりする。そういうお店をやりたかったんで、裏弁天にした、というのはあるかもしれない。あとは、弁天通りにお店をやっている友人もいるので。**近くに友達がいるっていうのはやっぱり良い**ですよね。



Q　ちょっと時間が空いたら、
まちなかでどう過ごしたい？

杏菜　朝はkoiさんでモーニングを食べたいですね。そのあとは……本屋を閉めて本屋に行くのかっていう話にはなるんですけど、煥乎堂さんや水紋さんに行って、ゲットした本を広瀬川沿いで読みたいですね。**他の本屋さんに行くと、自分の中にはなかった新しい視点で本を選ぶことができる**んですよね。

慎太郎　私も「広瀬川で本を読む」ですね。丸一日休みだったら、家から積読本を持っていくのではなくて、**その日パッと「面白そう」と思った本をその日に買って、眠くなるまで読みたい**です。スポーツばかりだった当時の愛読書はプロ野球選手名鑑だったんですけど。だいぶ変わりましたね。

野口　飲んだり食べたりしたいですね。Bentena SHOPでホッピー飲んだり、大河屋さんで蕎麦食べたり。あと、たまにスズランに行きますね。**あの感じのデパートって、もうあんまりないんで。**無駄にエスカレーターの上まで上がっていって、空間を楽しむというか。

Q　お店を構えて営業している中で、「最高な瞬間」は？

野口　自分が「行きたい」って思うようなお店を、頑張って続けることが大事だと思っていて。難しいんですけど、店をやっていると、どうしても妥協しなきゃいけない部分が出てくるんですよ。でもそれを、うまく考えてやると、お客さんが来て、ワイワイ飲んで帰っていく。そのとき、「ああ、今日もやってよかったな」と思う。**自分がどんなにカッコよく作ったとしても、最後に店を仕上げてくれるのはお客さんなんですよ。**自分のこれまでの経験を活かして、それが実現できた、ということが嬉しいですよね。

慎太郎　今、やりたいことを完全に表現できているわけではなく、試行錯誤しながらではあるのですが、その**「試行錯誤すること」自体を純度百パーセントでできる**、ということですかね。学校の授業には時間と内容の決まりがあって、テストがあるからこのペースで、というフレームがあります。それはいい面もあるけれど、純度百パーセントで理想を追い求めるのは難しい。それに対して今の場所では、「理想に近づけること」がやりやすい環境で、すごく楽しくやれています。そのぶん、結果は全部自分たちに跳ね返ってくるんですけど。

杏菜　自分自身が納得した形でお店をやりたいと思っているので、**私たちの大切にしたいものを大切にした上で、お客様に向き合える場所**をもてたということは、すごく幸せなことだと思っています。











前橋国際芸術祭2026 - 地域協働プログラム
ARKHENODE
2026.07.18（土）第4回 簡易記録
制作：市根井直規
ツール：https://studio.zine-ken.jp

ゲスト
金山慎太郎（hengeni）
金山杏菜（hengeni）
野口泰平（CASA FRESCO）

アルケノード編集委員会
企画　田中隆太（マチスタント）
デザイン　寺澤由樹
編集　市根井直規（まちのわーくす）

Instagram：@arkhenode

アルケノード Season 1

まちを耕す地元のひと・店と。

6/13（土）　第1回　まちの端、川沿い、音楽
Guest：近藤康裕（グルマンカレー）、MEG（MEGREM studio）

6/20（土）第2回　建築家と飲食店、それぞれが見るまちなか
Guest：木暮勇斗・新井裕作（AANE/IINE）、玉橋南実（Hazumi）

7/4（土）第3回　学生の頃からまちなかに関わるふたり
Guest：竹内躍人（ルルルなビール）、岡田友大（Maebashi Works）

7/18（土）第4回　裏弁天の逆襲
Guest：金山慎太郎・金山杏菜（hengeni）、野口泰平（CASA FRESCO）

2026年6月～7月開催　全4回
時間　15:00～18:30

Instagram @arkhenode